

**問題Ⅱ** 以下は美術史家の稲賀繁美による「世界美術史の海賊史観にむけて——文明の海洋史観を越えて」という文章からの抜粋である。この文章を読んで後の問いに答えなさい。

1. 海賊行為とはなにか：覇権的権力への地域的抵抗への視点

現代において海賊というと、一方で電子機器類の発達にともなう海賊版、他方では sea lane の要所、ホルムズ海峡封鎖問題やソマリア沖、さらにはマラッカ海峡で頻発する海賊行為のことが念頭にのぼる。より現代美術の世界に限定すれば、グッチやエルメスの図柄を利用した縫い包み作品が商標への侵害に相当するとして訴えられた、といった複製権への法的侵害が、裁判沙汰になったりなりかねなくなったりして耳目をそばだたせる。だがこうした法律上の著作権問題の背後には、そもそも欧米近代社会で確立された法律文化、そしてそれが前提とする価値観(およびその矛盾・混乱ぶり)が透けてみえる。日本の現行の著作権なども英米法の複製権と大陸法の著作権との歪な複合物である。そこには「著作物」を「創作的に表現」したものと定義して、その「著作権者」の権利を保護するとあるが、この文言には、そもそもの出発点からして、哲学的に定義に欠陥があるうえ、もはや現実にも対応していない。複製権に関する法的規制は、実際には原著者の利益保護とは無関係に、経済的利潤の確保のための便法に変質しており、利潤には無益となれば著者の権利などすぐにも放擲される。

ポール・ゴーガンは海賊か？

欧米近代との呼び方は、いかにも乱暴な枠組みだが、その限界は欧米社会がその外部と接し、近代の掟が通用しない現実直面すると、たやすく露呈する。20世紀への転換点にタヒチに旅立った藝術家にポール・ゴーガンが知られる。かつての盟友であったカミーユ・ピサロはこう毒づいた。「ゴーガンはこのあいだまでペルシア人や日本人から盗み事をしていたが、今度は南太平洋で海賊行為と

いうわけだ」と。ここには印象派の巨匠、政治的にはアナキストのユダヤ系フランス人が、いかに藝術における独創性にこだわり、他人からの剽窃<sup>ひょうせつ</sup>や無断借用に道義的な義憤を抱いていたかが、如実に知れる。

この一節は、フェミニズム美術史全盛の頃、ゴーガン批判に絶好の発言として珍重され、利用された。アビゲイル・ソロモン=ゴドーがその代表だろう。彼女は三点にわたりゴーガンを許しがたい植民地主義者として糾弾<sup>きうたん</sup>した。まず海賊行為では藝術創造とは見なしがたい。つぎにゴーガンのビジン言語はつけ刃で正統性に欠ける<sup>かみまく</sup>贗作だ。さらにゴーガンはタヒチの少女売春<sup>(売)</sup>や人身売買<sup>(買)</sup>に関わった性犯罪者だ。かかる欺瞞<sup>ぎまん</sup>のうえに巨万の富を築いたゴーガンの藝術など言語道断というわけだ。まるでゴーガンそのひとがフランス植民地主義のすべての悪徳をひとりで捏造<sup>ねつぞう</sup>したかのような断罪であり、生前の画家ご本人には無縁にひとしかった没後の社会的栄達や天文学的商品価値付与の責任まで、すべてを画家個人に押し付けてその贖罪<sup>しよくざい</sup>を迫る論法からは、彼女がいかに男性文化英雄を憎み、蛇蝎視<sup>だかつし</sup>していたかが窺える。



ポール・ゴーガン『タヒチの女(浜辺にて)』, 1891年, オルセー美術館蔵

だが今になってみると、この糾弾は、かえって論者が暗黙の道徳的前提としていた価値観の反動性、狹量さを露呈させている。少女売春というが、これはキリスト教道徳観によって母系性社会タヒチを否定するに等しい。ゴーガンは西洋植民者の横暴ぶりを発揮した植民地主体だったどころか、むしろタヒチ社会の「野蛮な」掟に順応した文明人失格者。ビジン言語は非正統というが、正統言語の権威など歯牙にもかけないゴーガンの傲岸<sup>ごうがん</sup>さこそが、その藝術の本質だったはず。そもそも植民地状況にあってすでに純粋・正統な言語使用状況など社会的に存在していなかった。この時代環境にあって、ゴーガンに純粋・正統なタヒチ表象を要求するほうが倒錯している。そして借用や海賊行為では創作とは認めがたいという価値観こそが、西欧近代と呼ばれる社会に特有の、藝術家個人の天才への信仰に裏打ちされている。プロメテウス型の男性天才として崇められた藝術家を徹底糾弾する姿勢は、彼の栄達への嫉妬<sup>(妬)</sup>の表明でしかなく、その限りで、実は天才神話の価値観を前提として、それを擁護するという、極めつきの不徹底ぶり、体制迎合振りを発揮していた。

### モダニズム価値観の問い直し

この「体制」こそが、モダニズムと呼ばれた価値体系にほかなるまい。美術史における海賊行為を再定義する以上、そもそもこのモダニズムが根拠としてきた価値観そのものを問い直す必要がある。藝術家の個人名への執着と無名性への軽蔑、個人的独創の崇拝と集団的製作の否定、オリジナル作品賞賛と複製の唾棄、創作の尊重と贗作<sup>しゆんさく</sup>の峻拒<sup>しんきょ</sup>といった弁別からなるこのモダニズム体制は、欧米近代の商品・金融経済による世界市場への覇権確立と表裏一体であり、美術館や世界美術市場などは、その経済的覇権に寄生する上部構造でしかない。一言でいえば、欧米近代こそが世界史最大の「海賊」にほかならない。インドの諺にもあるとおり、<sup>(2)</sup>小さな泥棒はただの泥棒だが、巨大な泥棒とは王様、つまり領土権、制海権、制空権を握った覇者の謂なのだ。してみれば、しょせんゴーガンなど、フランス植民地主義のなかの「小さな泥棒」のひとりに過ぎまい。そのゴーガンを利用して大金を稼いだ輩、そしてソロモン=ゴドーの正義感溢れる義憤を彼女にまんと植え付けた巨悪こそが、美術史における今後の「海賊研究」によって解明されねばならない標的であるはずだ。

## 2. 国民＝国家・欧米中心モダニズム史観の根底を問い直す

乞食は賤しいとされるが、イスラーム圏ではラマダーンの季節などとりわけ、一番威張っているのが、ほかならぬ乞食である。なにしろ乞食のおかげで裕福な人々は施しという功德を発揮する機会を得るのだから。また仏教圏にあっても托鉢は重要な修行であり、施しをする行為から社会関係の基礎が築かれている。こうした文化圏にあつては、無断拝借も窃盗も、それだけで犯罪を構成するわけではない。私有財産が否定されるような共産主義的理想社会にあつては、そもそも財産は人民の共通財であり、それを借用する権限はすべての人民に押しなべて共有される。とすれば中国大陸出身の学者には他者の業績からの引用の手続きが徹底しない、とお嘆きの筋もあるが、どうだろう。人民中国にあつては公共図書館で入手できる情報について、いちいちその出所となる個人を特定するという手続きこそが反社会的行為だったはずだ。とすれば、オリジナリティ尊重の価値観こそが、所有の哲学から脱却できない、ブルジョワ社会の唾棄すべき小市民意識にほかなるまい。[中略]この個人財産所有への執着の異常増殖が、西欧近代社会の世界秩序構築と表裏一体に進行したことは、世界史の常織だろう。

(稲賀繁美「世界美術史の海賊史観にむけて——文明の海洋史観を越えて」『あいだ』192号、『あいだ』の会、2012年。文章を一部抜粋改変)

註：

- (ア) ポール・ゴーガン Paul Gauguin (1848～1903)は、フランスの後期印象派の画家。西欧文明に絶望し、1891年にタヒチに渡って活動したが貧困の中で死去した。
- (イ) カミーユ・ピサロ Camille Pissarro (1830～1903)は、フランスの印象派の画家。第一回印象派展から参加し、ゴッホやセザンヌ、ゴーガンなど若手の画家たちとも交流があった。
- (ウ) ビジン言語 現地人と貿易商人などの外国語を話す人々との間で異言語間の意思疎通のために自然に作られた混成語のこと。
- (エ) プロメテウス ギリシャ神話に登場する神でゼウスの反対を押し切り天界の火を盗んで人類に与えた存在として知られる。火を使えるようになった人類は文明を築いたが、兵器を用いてお互いに殺し合う存在となった。ここではこのような宿業を背負わされた、悩める「人間」一般の意味で使われている。

問 1. 下線部①「ゴーガンはこのあいだまでペルシア人や日本人から盗み事をして

いたが、今度は南太平洋で海賊行為というわけだ」に関して筆者自身はどう考えているか。最も近いものを以下の選択肢からひとつ選びなさい。

- a. ゴーガンは著作権の法的侵害を繰り返して巨万の富を築いた海賊であり、藝術家とは認めがたい。
- b. ゴーガンは西洋近代の価値観からみると海賊行為を行っているとみえるにすぎない。
- c. ゴーガンは美術界にプロメテウスの天才として長い間君臨した男性文化英雄である。
- d. ゴーガンはタヒチの少女売春や人身売買に関わった性犯罪者であり、フェミニズム的観点からは許しがたい。
- e. ゴーガンは西洋植民者の横暴ぶりを発揮した植民地主義者であり、非正統的な贗作者である。

問 2. 下線部②「欧米近代こそが世界史最大の「海賊」にほかならない」とはどのような意味だと思うか。あなた自身の理解を500字程度で書きなさい。